

No Limit

第7期生 岸本 啓太郎

「全員に無理だと反対されれば、ためらったり、やめてしまう人も多いだろう。だが、それは本当に不可能なことなのだろうか。反対する人たちの言うことは、本当に正しいのだろうか。正しかった、間違っていた、は結果ではなく、自分自身で出す答えなのだから。」この言葉は、私が敬愛する登山家栗城史多氏の言葉である。小野ゼミに入ると決めたとき、それを周囲に話すと、決まって「めちゃくちゃエグイらしいよ」、「やめておきな」という言葉を返された。そして、小野ゼミに入ってから、英語で論文を書くことにした。そのときも、周囲から「日本語で論文を書くのも辛いのに、無理だ」という言葉を返された。

小野ゼミに入る前も、入った後も、「無理」、「反対」、そして「不可能」という言葉が、私には常に付きまとっていた。私は、その度に自分の意志によって、自分の進むべき方向を決めてきたが、途中、苦しくて、辛くて、逃げ出したくなる時期も、確かにあった。ケースやディベートは、毎回何が正しいのか、どう考えれば、自分たちの答えを出せるのか、悪戦苦闘していた。三田祭論文執筆は、常に「なぜそうなるのか」と「だから何なのか」ということに関して、オリジナルな主張が求められた。しかし、それらの困難を乗り越えることができたのは、私には大きな志を共にし、切磋琢磨できる同期生がいた。苦しい時に道を示してくれる先輩がいた。私を慕ってくれる後輩がいた。そして、ダメな私を小野ゼミに受け入れてくれて、叱咤激励してくれる小野先生がいてくださったからだ、卒業を控えた今、再度確信する。

こうして、仲間に支えられ、先輩に支えられ、後輩に支えられ、そして師に支えられて辿りつくことが「今」という風景は、本当に素晴らしいものであると思う。そして、この風景を見るための仲間がいて、先輩がいて、後輩がいて、そして師がいる環境を選択することができた自分は、「正しかった」と思う。小野ゼミに入る前に散々聞かされた「エグい」という言葉に、しり込みしなくて良かった。小野ゼミに入ったあとの、辛く、答えの見えないケースやディベートから逃げなくて良かった。「無理だ」と言われた英語の論文執筆を諦めなくて良かった。小野ゼミにすることができて、本当に良かった。だから、深く感謝しようと思う。同期生に、先輩に、後輩に、そして師に、深く深く、感謝しようと思う。社会に出るにあたって、さらに苦しいこともあるだろう。しかし、小野ゼミに入るという選択をすることができた自分、英語で論文執筆をするという選択をできた自分、そして、困難を乗り越えるための仲間を得ることができた自分に自信をもって、更なる困難を乗り越えていこうと思う。そして、自身の選択を成し遂げる上で、私を支えてくれる方々に対し、深く深く、感謝をし、自分自身で出した答えを「正しい」ものにしていこうと、今ここで、新たに決意をすることにして、筆を置くことにします。



国際eビジネス学会優秀論文賞を受賞して
(著者は後列左端)